

文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 丸亀市の金毘羅街道と社寺を訪ねる

講 師 宮武 譲

(郷土歴史研究家)

平成26年6月22日(日)

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 文 化 財 保 護 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 金毘羅参詣丸亀街道

金毘羅参詣の街道は、金毘羅信仰の隆盛期には「四国の道は金刀比羅に通ず」といわれたほどで、多くの金毘羅街道と呼ばれる街道がありました。金毘羅側では徳島からの阿波街道、高知・愛媛からの伊予街道、高松からの高松街道、丸亀からの丸亀街道、多度津からの多度津街道と呼びましたが、出発地では金毘羅を目指す街道はすべて金毘羅街道といいました。讃岐国内の各港からも参詣客を迎え送る金毘羅街道があり、中でも高松・丸亀・多度津からの街道はにぎわっていました。特に丸亀からの街道は金毘羅詣での代表街道として、主に上方以东の人々の参詣道であり、案内記・案内絵図が多く発行され、有名人の上陸も多く、丸亀は金毘羅さんの門前港観を呈していました。

2 みなと公園の石灯籠

みなと公園に一对の石灯籠があります。これは中府三軒家にあった三基のうちの二基で、天明八年（一七八八）岡山古手屋中の寄進で、明治二十四年（一八九一）中府の大鳥居のそばに移されたと刻



みなと公園の石灯籠

まれています。平成元年に再びみなと公園に移されました。また、もう一基は善通寺市の金倉寺にあります。

3

新堀湛甫

しんぼりたんぽ

江戸時代、金毘羅信仰が広がると、全国から参詣に来る人々が増え、丸亀の港は金毘羅参詣客の上陸地として賑わいました。しかし丸亀の港は遠浅で「川口」と呼ばれ、設備も良くありませんでした。

文化三年（一八〇六）、福島町北岸に福島湛甫が造られました。しかし、その後も金毘羅信仰はなお一層高まり、上方よりの便数も激増し福島湛甫は手狭になりました。天保二年（一八三一）、湛甫の構築と灯籠の建立を丸亀藩に願入れ、幕府の承認を得て翌三年に工事を着手、天



丸亀港の雁木

保四年に東西八十間（二四五・四四メートル）、南北四十間（七二・七二メートル）、入り口十五間（二七・二七メートル）の湛甫が完成しました。この湛甫を新堀湛甫と呼び、その付近一帯の地名を新堀と呼びました。湛甫ができると阪神・岡山方面からの金毘羅参拝の船が往来し、今までにも増して丸亀はいつそう繁栄しました。

新堀湛甫と太助灯籠は今も丸亀港に残っており、江戸時代、金毘羅参詣客が上陸した面影を残しています。

4 江戸講中灯籠（太助灯籠）

えどこうじゅうとうろう

丸亀港が金毘羅参詣客の上陸地としてにぎわっていた天保年間（一八三〇～一八四四）、海上の安全を願い、“江戸千人講”の寄進により青銅製の灯籠が造られました。

この灯籠は三段の石台の上に三段の青銅の台があり、八頭の龍が水煙を吹



江戸講中灯籠（太助灯籠）

き上げている八角形の笠、竿の四方にもりを組み合わせた装飾があります。石の台には「江戸講中」と大書され、青銅の台には、八角の全面に寄附者・世話人等一三八一名の氏名が住所・職業等を添えて書かれており、その中でも「奉納金八拾両江戸本所相生町二丁目塩原太助」は一面を占めています。後年、この灯籠建設のため一人で八十両を寄進した二代目塩原太助を取りあげて「太助灯籠」と呼んだ人があり、今ではこの呼び方が一般化しています。

灯籠は昭和五十二年（一九七七）一月の市文化財指定を機に、昭和五十二年十二月に修理復元され、再び丸亀港に美しい姿を見せています。灯籠は当初三基建てられていましたが、新堀湛甫入口の北側に並んでいた二基の灯籠は、第二次世界大戦時の金属回収により撤去され姿を消しています。

5 玉積神社

新堀湛甫を新築するとき、浚渫^{しゅんせつ}した土砂で埋立地を作りました。口碑によると、積み上げた土砂の上に建立されたので玉積の神と呼んだといわれ、維新前までは金毘羅宮丸亀祈禱所でした。現存の本殿は京極藩の大阪蔵屋敷内にあった金毘羅宮本殿を明治四年（一八七一）に移築したものです。

玉垣・灯籠には江戸を始め瀬戸内沿岸諸国及び地元の寄附者名が見えます。

6 妙法寺（蕪村寺）

富屋町の南寄りにあるこの寺は、「正因山実相院妙法寺」と号し、天台宗延暦寺派です。本尊は金剛界大日如来で、左右に智証・伝教大師像を安置し、元三大師を祀っています。また、大黒天・地藏菩薩も祀っています。

寺の起こりは天平年間（七二九～七四九）に行基菩薩が諸国を遍歴した際、豊田郡和田村（現在の香川県三豊郡豊浜町和田）の正因山に一字のお堂を建立したことに始まります。長曾我部元親の兵火による焼失の後、再建されましたが、文禄四年（一五九五）、豊田郡坂本郷（現在の香川県観音寺市坂本町）に移り、当時は日蓮宗不受布施派に属していました。



妙法寺

慶長二年（一五九七）には丸亀城主生駒親正の命により妙法寺中興一世 日眼上人の時、現在の地・丸亀に移りました。寛文六年（一六六六）に徳川幕府の命により日蓮宗不受布施派が禁止になり、寛文九年に京都・毘沙門堂の末寺となり、天台宗に改宗し、現在に至っています。

妙法寺は丸亀藩主京極家の祈願所でもありました。文久二年（一八六二）には、京極朗徹から京極家の家紋である「四ツ目」の入った幕が元三大師宝前に奉納され、京極家の武運長久を祈願しました。以後、元三大師宝前に四ツ目の紋入りの幕を掛けることが許されました。

※妙法寺と与謝蕪村

讃岐・琴平には望月宋屋門下の俳人が多く住んでいて、その中に当時妙法寺檀家総代の菅暮牛（琴平の豪商）がいました。

明和三年（一七六六）、与謝蕪村は菅暮牛をはじめとする讃岐の俳人仲間を訪ねるため、ある秋の夕方、丸亀の港に上陸し、そして一夜の宿を借りるべく妙法寺を偶然に訪れました。蕪村はしばらく妙法寺に滞在し、『紙本墨画蘇鉄図』（国の重要文化財指定）などを描き残しました。以後、讃岐滞在の間に数回にわたり妙法寺を訪れ、明和四

年から明和五年の初夏にかけて妙法寺に逗留し、お礼の意味を込めて、蕪村は客殿の襖を表装し、絵を描き、住職の歓待に応えました。そのため、別名“蕪村寺”と呼ばれています。

7 京極高朗

きょうごくたかあきら

万治元年（一六五八）播州竜野城主京極高和が丸亀城主になって以来、明治二年（一八六九）の版籍奉還まで七代二百十年余にわたり、西讃岐は京極家によって統治されました。

高朗は二代目藩主高豊と並ぶ名君で、文化八年（一八一）十四歳で丸亀藩主となり、嘉永三年（一八五〇）まで実に四十年にわたって、新堀湛甫の築造、うちわ作りの奨励をはじめ、海運、産業、文化に不滅の功績を残し、丸亀発展の礎を築きました。また、詩人としても有名



京極高朗墓所

で、参勤交代で江戸往復の際は、東海道や中仙道を通りながら、景色の優れた土地で詩を作りました。その詩は一万首以上と言われ、名著『琴峯詩集』におさめられています。

高朗は、明治七年（一八七四）七十七歳で没し、遺言により玄要寺に葬られました。

七人の藩主のうち、五人までは滋賀県坂田郡清滝の徳源院とくげんいんに墓がありますが、六代藩主高朗の墓だけが、丸亀市南条町の玄要寺境内にあります。南北約九メートル、東西約二十メートルの土堀に囲まれた中に「従五位京極高朗之墓」と刻まれた墓石があり、その前に二対の灯籠と鳥居が建っています。門や扉には京極家の四ツ目の家紋が刻まれています。

8 京極伊知子きょうごくいちこ

京極伊知子は、若狭国小浜おばま（福井県）の殿様であつた京極忠高の姫として生まれました。父の忠高は、その後、雲州松江藩（島根県）二十六万石の大名となりましたが、わずか四年で急に亡くなりました。

忠高には、伊知子姫のほかに世継ぎの男の子がいませんでした。その頃幕府は、世

継ぎの男の子がいなくてその藩を取り潰すことにしていたので、松江藩も取り潰されてしまいました。けれども、京極家はそれまで大きな手柄をたてていた大名だったので、伊知子姫のいここであつた京極高和を、播州龍野（兵庫県）六万石の大名としました。幕府の特別のはからいで、京極家は残ることになったのです。伊知子姫は、その頃家老多賀宮内の妻になっていました。そして、一人男の子が生まれていました。

播州龍野の殿様になった高和には、どうしたとか子供ができませんでした。そこで、伊知子姫の一人息子を養子に迎え、高和の跡取りとして江戸の屋敷に住まわせることにしました。このときの、母子の別れの悲しみや、優しい母の愛情を綴ったのが、「涙草」です。「涙草」の美しい文章は、昔のままに、今も残っています。



壽昌院夫妻の墓

京極高和が播州龍野から国替えで丸亀に移ってきたとき、伊知子姫も瀬戸内海を渡り、丸亀に來ました。墓は、玄要寺にあります。伊知子姫は、井上通女とともに丸亀が誇る女性の一人です。

9 寿覚院

やまさきいえはる

寛永一八年（一六四一）、山崎家治が肥前富岡（熊本県天草郡）藩主から西讃岐五万石余で入府した際、その菩提寺として寿覚院を建立しました。浄土宗知恩院の末寺で、山崎家治・俊家としいえの位牌があり、また観音堂西側の墓地には、丸亀城の石垣を築いたと伝えられている名工・羽坂重三郎や四国で最初の種痘を実施した医師・河田雄禎の墓もあります。

寿覚院には金毘羅から移された十一面観音を祀った観音堂があります。この観音様に献灯という形で左右に灯籠がありますが、これは左右形が異



寿覚院の観音堂

なり、一対とはいえませんが。観音堂は本堂の南側に東向きに建ち、建立年代は本堂と同時期とみられ、丸亀市内では屈指の古い建造物です。屋根は入母屋造の本瓦葺で、正面に千鳥破風が付き、三方に縁を巡らせています。内部には厨子があり、本尊が祀られています。本尊は、弘法大師の作と伝えられる十一面観音菩薩立像です。来迎柱の周りは金箔を押し、極彩色で飾られています。

10 寿覚院山門前の灯籠と道標

金毘羅奉納灯籠

この石灯籠は、金毘羅大権現への献納灯籠の一つで、元は金毘羅街道の門戸であった福島堪甫の突堤にあったものです。台石には願主、世話人、願主名の他に「左金毘羅道」本宮百五十八丁や札所への距離など道標も兼ねた彫り込みがあります。寛政八年（一七九六）に大坂講中によって建てられました。



明治四十四年（一九一一）寿覚院山門脇に移転され、平成六年に丸亀市の金毘羅街道景観整備事業によりこの地に再建立されました。

南条町道標

金毘羅参詣の人たちの道しるべとして建てられた石柱で、元は十メートル程南の交差点（元は三差路）にあり南条町の道標として市民から親しまれていた道標です。北面には、「すくこんひら」東面に「左こんひら道」南面「右かわくち」と明瞭に掘り込まれており、石工は小野利助とあります。この道標は、明治十三年（一八八〇）に南条町を中心とした地元有志の手で建てられた後、県道丸亀詫間線の新設、拡幅などにより移転を繰り返しましたが平成六年にこんぴら街道に面するこの地に永久保存するこ
とになりました。

寿覚院の道標

この道標は、寿覚院境内にあったもので「南条町寿覚院南一丁」とあることから、元は本町筋の角付近（北方向）に建てられていたものであると思われます。石柱には「丸山城築城者羽坂重三郎墓所」「昔金毘羅大権現本地仏」など寿覚院のことや、レリーフ状の指差しで、道隆寺や道場寺（郷照寺）の方角を示しているほか「こんぴらぜんつうじへんろみち」など、現在の道路標識の役目をしています。

11 法音寺

浄土宗西山禅林寺派で摂取院海徳山法音寺と
呼びます。本尊は阿弥陀如来、脇土は観音・勢
至両菩薩です。

万治元年（一六五八）、丸亀京極藩初代藩主京
極高和に従い竜野から丸亀へ移り、延宝二年（一
六七四）に創立されました。その後元禄三年（一
六九〇）、横町にあった門口を東に付け替え、元
禄五年、山門が建立されました。墓地には文学
の井上通女、俳諧の斎田五蕉、勤皇家の土肥大
作などの墓もあります。

12

井上通女

いのうえつうじょ

井上通女は万治三年（一六六〇）六月十一日、丸亀藩士 井上儀左衛門本固の長女と
して生まれました。幼いときから聡明で、和漢の学ばかりでなく、ぎざえもんとかた
しずかりゆう なぎなた 静流の薙刀にも秀で



法音寺山門

ており、文武両道に達していました。十七歳の時に婦女の心得を説いた『処女譜』しよじよのふを、次いで『深閨記』しんけいきを書き表して、その秀才ぶりは、早くも「讃岐丸亀に女博士あり」と騒がれる有り様で、藩内でも評判の才女でした。

そのころ、当時の丸亀藩主 京極高豊の母 養性院は江戸にいて通女の名声を聞き、藩主に頼み、通女を侍講として江戸に招きました。その道中日記をまとめたものが『東海紀行』とうかいきこうです。

通女は、江戸で暮らすこと九年間、養性院にお仕えする一方で、新井白石や室鳩巢^{むろきゆうそう}など著名な学者たちと交遊し、大いにその学識を広めました。鳩巢は、通女を評して「才女にて男子に候はば英雄とも相成るべきに惜しき事に候」と激賞しました。この在府期間を綴ったものが『江戸日記』です。

そして元禄二年（一六八九）、養性院が他界したのを期に帰国を願い出て許され、十年ぶりに丸亀へ帰ることになりました。その帰郷の旅の様子を書き留めたのが『帰家日記』^{きか}といい、在府中の『江戸日記』と前作の『東海日記』とを合わせて「通女三日記」と呼んで、今もなお江戸文学の秀作として広く鑑賞されています。

通女の墓は南条町の法音寺にあり、丸亀高校校内には顕彰碑と井上記念館があります。

金刀比羅宮の一の鳥居で、花崗岩製の明神造りです。高さ二十二尺（約六・七メートル）柱の間十五尺（約四・五メートル）、上部中央に「金刀比羅宮」と書かれた青銅製の額が掲げられています。明治四年（一八七二）に大阪府堺、山口県、青森県及び地元丸亀県の人々によって建立されました。昭和十八年（一九四三）地震で崩れ、金刀比羅宮が修復しました。

【参考文献】

「金毘羅産経丸亀街道調査報告書」 昭和六十三年二月 丸亀市教育委員会

「新編 丸亀市史2 近世編」 平成六年十一月 丸亀市

「新修 丸亀市史」 昭和五十四年六月 丸亀市役所

丸亀市ホームページ

妙法寺ホームページ

現地説明板



太助燈籠

蛭子神社

丸亀

法音寺

妙法寺

寿覚院

玄要寺

金毘羅奉納灯籠

京極高朗墓所

丸亀城

中府の大鳥居

6月22日（日） 丸亀市からの復路

◆ＪＲ予讃線

（丸亀駅）

（高松駅）

12：05 発 → 12：32 着

12：15 発 → 12：51 着

12：27 発 → 12：54 着（特急）

次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 番町界隈の社寺を巡る（予定）

とき 平成26年9月28日（日）

9：30～12：00頃

集合場所 四番丁スクエア（四番丁小学校跡地）北門

講師 藤井 雄三さん（高松短期大学講師）

☆広報「たかまつ」9月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL 839－2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

◆ＪＲ高松駅から徒歩約10分

◆ことでん瓦町駅から徒歩約15分

◆ことでんバス

紺屋町バス停から徒歩約2分



「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の
端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつ
けましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。